

民国元年における新劇同志会の演劇活動

鈴木直子

はじめに

中国初期の話劇団体春柳社の活動は主に二期に分けられる。日本留学時期の活動を前期とし、帰国後を後期とする見方だ。これは当時春柳社の社員として活動に加わっていた欧陽予倩の『回憶春柳』による⁽¹⁾。それによると日本で『熱血』の公演後春柳社の活動が停止しており、1912年に上海に帰国した者たちが新劇同志会を組織し、演出の際には「春柳劇場」という看板を掲げた、そこで日本での上演時期を前期春柳とし、帰国後を後期春柳とすれば、実際に適しているというのだ。確かに新劇同志会は1912年すなわち民国元年に陸鏡若によって組織された。しかし「春柳劇場」という看板を掲げての活動は実際には民国三年のことであり、新劇同志会の誕生から二年後のことである。「春柳劇場」という名の示すように新劇同志会が春柳社との関係を持つ団体であることは明らかだが、ではなぜ民国元年の時点では春柳社を名乗らなかったのだろうか。民国三年の「春柳劇場」として開幕するまでの時期の新劇同志会の活動というのは、これまで演劇従事者の回憶録や演劇史の中で語られることはあったが、実際の活動調査というのはなされてこなかった。回憶録としては上記の欧陽予倩の『回憶春柳』『談文明戲』『自我演戲以来』や徐半梅の『話劇創始期回憶録』があり、また演劇史や雑誌の類では徐慕雲の『中国戲劇史』や『菊部叢刊』、『春柳』が挙げられる。本論では、この新劇同志会が組織された民国元年にどのような演劇活動を行っていたのかを知るため、当時の新聞『申報』『時報』における演劇広告や劇評を調査し、当時の実際の活動を追っていきたい。そして実際の活動を明らかにした上で、新劇同志会がどう「春柳劇場」、つまり春柳社と関連付けられ、中国話劇史の中でどう位置付けられるのかを考察してみたいと思う。

1. 従来の説における新劇同志会の活動

先に従来新劇同志会の活動が演劇史でどう語られてきたのかを整理してみた

い。

まずこの時期の新劇同志会の活動を記述したものに、徐慕雲の『中国戲劇史』⁽²⁾、また雑誌『菊部叢刊』にある「春柳始末記」⁽³⁾、同じく雑誌『春柳』にある「春柳社之過去譚」⁽⁴⁾がある。このうち徐慕雲の『中国戲劇史』には朱雙雲の『新劇春秋』を参考にした当時の演出記録があり、そこから新劇同志会の活動を抜粋してみよう。

一九一二年

三月 陸鏡若が新劇同志会を組織、張園（上海）にて公演、会員に欧陽予倩、呉我尊等。

中華演劇団と新劇同志会が上海青年会にて合同公演。学生遊芸会と新劇同志会張園（上海）にて合同公演。

後に新劇同志会は新新舞臺（上海）にて単独公演。

四月 新劇同志会蘇州にて公演。

五月 新劇同志会謀得利（上海）にて公演。

八月 新劇同志会常州に赴き、続けて杭州に赴く。

一九一三年

一月 新劇同志会湖南へ。

七月 新劇同志会湖南より上海に戻る。

陸鏡若により新劇同志会が組織されたのが「一九一二年の三月」、そして「張園での公演」で「会員が欧陽予倩、呉我尊等」というが、これを『申報』と照らし合わせて考えると張園での公演を行ったのは民国元年四月二十七日、二十八日（旧暦三月十一日、十二日）であり、開幕広告を掲載した日のことであろう⁽⁵⁾。また「中華演劇団と新劇同志会の上海青年会での合演」というのは『申報』報道での民国元年四月十九日、二十日（旧暦三月三日、四日）の公演にあたる⁽⁶⁾から、記述の順序は逆になるべきである。それから五月に謀得利での公演とあるのは実際には七月二十七日、二十八日（旧暦六月十四日、十五日）の『社会鐘』の公演のことと思われる。徐慕雲の記述する月日は旧暦と思われ、新劇同志会が開幕したのは確かに旧暦三月であるが、実際の報道からすると民国元年の一月の時点ですでに新劇同志会は名義上は「演劇同志会」として、「試演」という形式であつたにせよ、活動を開始しているのである。

次に『菊部叢刊』の「春柳始末記」⁽⁷⁾を見てみよう。そこから新劇同志会の上海での活動を抜粋すると、「辛亥の秋の武昌発起以来、春柳社員は日本より帰り国事に奔走、南北和議が成立してからは、各社員上海にて劇学を研究し脚

本を編纂、また国内の名流とともに新劇同志会を組織し陸鏡若が劇務主任に推された」「事務所を海寧路に設ける」、「三月二十九日黄花岡烈士記念大会が上海新新舞台で開催」「四月十九二十日四川路青年会にて兩日公演」「六月十五日陸鏡若訳の社会鐘、莊思緘、吳稚暉兩先生の校定を経て南京謀得利戲園にて兩晩連続公演」「七月張園にて三日公演」「十一月六日上海大舞台で一日公演」とあり、四月、六月、十一月（いずれも旧暦であろう）の記述は『申報』で確認できる報道とほぼ一致する。夏から冬にかけては新劇同志会の活動が『申報』や『時報』上では確認できないのだが、それはこの時期上海以外に地方公演に赴いていたことによる。「春柳始末記」は比較的詳細に記述がなされ、地方公演時期などは新聞資料等の裏付けはできないものの、当時の活動の一端を知るには貴重な資料といえる。翌年民国二年は新劇同志会の活動はほとんどが地方中心となり、特に湖南での活動が代表的なもので、社会教育団と活動を共にした⁽⁸⁾。（後には社会教育団から分化し、文社の名義で活動を行う）。そして再び上海に戻り、民国三年には「春柳劇場」を開幕させることになる。

2. 「春柳劇場」としての新劇同志会

民国三年四月十七日（旧暦甲寅三月二十三日）に『申報』には春柳社の「特別啓事」と「春柳劇場開幕宣言」が掲載された⁽⁹⁾。啓事によれば、まず「春柳劇場」というのは「新劇同志会全体会員により組織」され「会員の半数以上が留日した春柳社の旧社員」であるという。この時期他に「春柳新劇社」を名乗る者たちが出現し、資金集めを行ったりしており、それと「春柳劇場」とは全く無縁であることを表明したのがこの特別啓事なのである。民国三年といえ、文明戯がすでに盛んになり「甲寅の中興」と呼ばれるピークを迎えた時期である。前年の秋からは新民社や民鳴社といった文明戯団体が組織され活動を行っており、この他にも多くの文明戯劇団が誕生していた。そうした時期に当時では当然名の知れていたはずの「春柳」を冠した劇団が現れても不思議ではない。「春柳社」の系統にある新劇同志会のメンバーは、自らの「春柳」の正統性を主張するために、この時期「春柳劇場」の名を掲げ活動を開始するのである。日本で組織された春柳社の正式な後継団体は自分たちであるという決意表明をしたのがこの民国三年四月の春柳劇場の開幕なのであった。なお、「春柳劇場」というのはあくまで劇場の名義であって、団体名としては新劇同志会を用いた⁽¹⁰⁾というが、筆者としてはこの時期に敢えて「春柳」の名を顕示したことの意味を問いたい。「春柳」と名乗るのであれば、帰国後の民国元年か

らすでに名乗っていても良さそうなのであるが、彼らはそうせず新劇同志会を名乗った。その後二年を経てから「春柳」の名を前面に押し出し演劇活動を開始したのだ。「春柳社」の活動を語る時、日本留学時期の前期春柳と帰国後の後期春柳との二期に分けて考える必要があるが、この後期春柳といった場合は主に民国三年の春柳劇場開幕からを指すことが多い。となると、新劇同志会はどういう位置付けがなされるのか。従来の演劇史では新劇同志会を「春柳派」として、春柳の系統を汲む一派という扱いになっている⁽¹¹⁾。欧陽予倩も『回憶春柳』で同様に以下のように述べている⁽¹²⁾。

「ある一時期多くの良い役者が上海に集い、文明戲の全盛なる状況を作り出した。ここで私は思うのだが、上海の新劇とはやはり文明戲のことであり、学校演劇、進化団の組織を経てから、一つの系統となったのである。春柳劇場は別に系統を立てた。だから私は文明戲を中国の初期話劇の二つの系統に分けようと思う。二つの系統とは、一つは任天知率いる進化団、もう一つは陸鏡若率いる新劇同志会つまり春柳劇場と言える。」

自らが春柳社に参加し演劇活動に従事していた欧陽予倩にとっては、新劇同志会も春柳劇場も同様に春柳という枠組みで括れる団体ということになる。実際新劇同志会に参加していたメンバーには前期春柳社のメンバーも多くいた。

まず日本での春柳社の主要なメンバーが任天知、李叔同、謝抗白、曾存呉、呉我尊、欧陽予倩、陸鏡若、馬絳士、そこから任天知は単独で上海に帰り独自に新劇活動を、李叔同も春柳社から離れていく。春柳社という名義ではなく申西会という名義で活動をしたのは陸鏡若、欧陽予倩、呉我尊、謝抗白であり、このメンバーが帰国後の新劇同志会を支える中心だったのではないだろうか。同じく『回憶春柳』では民国元年当時のメンバーを「一九一二年鏡若が上海で新劇同志会を成立し、最初に参加したのは馬絳士、羅曼士、呉恵仁、蔣鏡（景）澄、姚鏡明、陸露沙等である。以後続いて参加したのが呉我尊、欧陽予倩、胡恨生、董天涯、董天民、鄭鷗鵠、馮叔鸞、管小髭、張冥飛、宋痴萍等だ。」という⁽¹³⁾。徐半梅の回憶では、「その頃の同志会の人材には本来陸鏡若、馬絳士、呉我尊、欧陽予倩、蔣景澄、呉恵仁等がいて、上海に来てから加入したのが董天涯、董天民、馮叔鸞、鄭鷗鵠、胡恨生、沈映霞等、また二名の執筆専門の宋痴萍、張冥飛がいた。この二人は脚本が書けたし広告や説明書（上演する劇のあらすじを書いたもの）も手掛け実に多才多芸であった。」とあり⁽¹⁴⁾、欧陽予倩の回憶と重なる。では、民国元年当時の新劇同志会ではどのようなメンバーがいて、実際どのような活動をしていたのだろうか。実際の報道上での新劇

同志会の活動を以下に見ていきたい。

3. 『申報』および『時報』の報道から

新劇同志会の名が初めて登場するのは、『申報』『時報』共に民国元年一月十八日の広告欄においてである⁽¹⁵⁾。『申報』上の広告を以下に拾い出してみる。

「歌舞臺 漫翁 鏡若 存吳 長倩 喜劇 鳴不平 客串 演劇同志會
男女學生新鉗時事演戲 鐵血」

出演場所は歌舞台で客演として新劇同志会（この時は演劇同志会と名乗っている）が参加したということが見て取れる。「男女學生合演 新辦時事新戲 鐵血」とあるから、主に学生を主体とした男女合演で演目は『鐵血』、『時報』からはこの『鐵血』という演目が六幕劇であり、当時の春柳社の幹事である曾存吳の新編新時代劇であることが窺える⁽¹⁶⁾（図1）。以下は『時報』の広告である。

「本月三十日夜七時歌舞臺にて開幕、陳べますに、春柳社幹事曾存吳氏の新編時代劇鐵血、脚本六幕、その筋が生き活きとし絶妙なのは脚本家の特長である。また陸鏡若、馬長倩が劇中の主役を演じる。その他の役者も三十人余り、皆演劇を学ぶ者で練習もすでに熟達。本月十八日（旧曆三十日）夜七時より歌舞臺にて開幕。切符代は経費以外を軍への義捐金とし、他に募金は行わない。愛国諸氏及び平素春柳社に賛同する者に謹んで申し上げる。当日のご光臨を願う。必ずや諸君を慰める期待あり。發起人代表 周覚、周在鼎、同啓 入場券一枚銀貨一元」

これによりこの時の新劇同志会の参加者は漫翁、陸鏡若、曾存吳、馬長倩の他役者三十名余りの規模であったことが分かる。広告中に「春柳社幹事」や「春柳社に賛同する者は」といった記述があるように、演劇同志会という名義の団体が春柳社と同系列の団体であることを明確にしていることを見逃してはならない。春柳社の演劇活動を日本留学時期の前期春柳社と中国に帰国後の後期春柳社と見なすとすれば、この民国元年から民国三年の春柳劇場開幕までの時期に活動した新劇同志会もまた春柳系列の演劇団体と考えられるからだ。

この『鐵血』に関しては後日『申報』の「自由談」に劇評が掲載された⁽¹⁷⁾。劇評によれば、上演場所は歌舞臺、「第一幕 逮捕 第二幕 公判 第三幕 譴戍 第四幕 家難 第五幕 玉碎 第六幕 血戦」と各幕に付けられたタイトルと「漢口の鐵血の事実を模写して事実を報じるを主とし」て作られ「鐵血の一劇は新聞界とも繋がりががある」といい登場人物も「主筆劉萬世」というジャーナリストを中心に行っていることから、当時の時勢を反映した革命色の強い演

目であったようだ。そもそもこの公演自体が「助餉」つまり軍への募金援助を目的にしたものであるから演目も自然と時事性があり観客に訴えかけるものになったのは当然であろう。この公演の観客数は千人余りというから、チケット一枚一元という割高な値段であっても相当の観客を動員したことになる。劇評では各幕の役者の演技に触れ第六幕で民軍が発起するクライマックスでは観客も大いに沸いた様子が伺えるから、演じる側の新劇同志会の熱演と観る側の観客の反応からこの劇は概ね盛況だったとみていい。

次に新劇同志会が活動を行うのは四月十九日のことである⁽¹⁸⁾。この時は「中華演劇團」⁽¹⁹⁾ 文士同志会」という名義での公演で、中華演劇團との合演であった。公演は十九日と二十日の二日間で中国青年会を借りている。各日演目が異なり、十九日は『打城隍』『目蓮救母』『砂硃紅痣』と陸鏡若編の『家庭恩怨記』を演じ二十日に『社會不平恨』『眩暈覺迷』『烏盆記』『吊金龜』『喜劇慈善述』を演じた⁽²⁰⁾。チケットは特等が一元、一等が六角であり三月と同様の金額だ。この時の公演に関しては、同月二十二日、二十三日に『家庭恩怨記』の劇評が『申報』に掲載されており、この時の『家庭恩怨記』が六幕⁽²¹⁾であったこと、陸鏡若、張蘇新、羅漫士が参加していたことが分かる。それぞれの役柄と役者の演技に対して概ね好意的な評価がなされている⁽²²⁾。

劇評が掲載されてから数日後の同月二十七日、今度は新劇同志会が開幕広告を出す⁽²³⁾ (図2)。この時は公演場所として張園を借り、公演日は二十七日、二十八日の土日二日間、前回の中華演劇團との合同公演時と同様「改良新舊各劇」と銘打ち幾つかの旧劇や改良新劇を演じた。その中の演目の一つとして『家庭恩怨記』があり、前回の公演で好評を博したことによる再演であるようだ。今回はチケットの額を三等に分け特等一元、一等六角とさらに二等の四角まで、それ以外に「童僕券一角備有香茗不取分文」とあるから従者も一角(茶代を含む)で観劇できたのであろう。演劇の他にも「泰西佈景技師中外音樂及昆曲」とあり目新しい西洋の舞台セットや西洋音楽も取り込んだ折衷型の催しとなった。

四月に開幕広告を出した新劇同志会は、七月にもまた『申報』に開幕広告を載せている⁽²⁴⁾。

「新劇同志会開幕広告

悲劇社会鐘この劇は日本の佐藤紅緑氏原作、社会主義を主張する悲劇である。その筋は慷慨激昂、舞台セットは高尚で優美な脚色、練習も熟達し、誠に今日稀に見る良い劇だ。七月二十八日(旧暦六月十五日)昼一時夜七時より英大馬路東の謀得利劇園を借りて上演。切符売り場は英大馬路の同

盟会機関部、九江里の新劇俱新会、望平街の新世社、海寧路の本会事務所である。当日は是非とも熱心な社会諸君のお早いご光臨を願う」

この時は日本の佐藤紅緑原作の悲劇『社会鐘』⁽²⁵⁾を演じ、七月二十八日昼一時と夜七時の二回公演で上演場所は謀得利劇場である。この謀得利劇場は民国三年に新劇同志会が春柳劇場として開幕する時に常用することになる劇場である。民国元年の時点でこのように二回も開幕広告を掲載させているのは、「開幕」というのが劇団が誕生したお披露目という意味合いではなく、単に上演を知らせる意味で使用されているためと思われる。この時期の新劇同志会はプロの劇団として定期的に公演を行っていたのではなく、「同志会」という名から分かるように新劇を志す者たちが集合した趣味の段階であり、公演も募金活動を目的とするなど、社会活動の一環としての演劇という立場に立ったものであったため、数ヶ月に一度自分たちの成果を試す試演的な要素が強かったのではないだろうか。

夏以降上海での活動を再開するのは十二月十四日⁽²⁶⁾でこの時は大舞台での客演、演目はやはり『家庭恩怨記』であった。メンバーには馬絳士、吳惠仁、張蘇新、陳警心、包亜男、馮慎儂、蔣鐘澄、金影有の名が見える。なお、『申報』にはそれより前の十一日の「来函」に「新劇同志会より 本会は陰曆六日に大舞台を借り一日公演を行う。団体入場券の外に半額優待券もあり、手紙にて連絡すること。臨時の通信所は開北北順微里六号馮宅、新劇同志会代表包亜男、馮慎儂同啓」と書簡を寄せ十四日の公演を予告している。ここからこの時の新劇同志会の代表者が包亜男と馮慎儂であったことが分かる。

4. 「春柳劇場」に至るまで

以上が民国元年における報道上の活動であったが、ここで新劇同志会のメンバーを整理しておきたい。民国元年の報道上に見られるのは、
一月十八日 漫翁、鏡若、存吳、長倩（幹事 曾存吳、陸鏡若）、
四月十九日 鏡若、蘇新、曼士、
十二月十一日 新劇同志会代表 包亜男、馮慎儂、
同月十四日 馬絳士、吳惠仁、張蘇新、陳警心、包亜男、馮慎儂、蔣鐘澄、金影有である。

一方、民国三年四月十五日の春柳劇場開幕時のメンバーは、
姚鏡面（明）、董天涯、謝抗白、吳惠仁、欧陽予倩、吳我尊、管小髭、易（馬）絳士、蔣鏡（景）澄、張蘇新、胡恨生、嚴忍厂、徐求安、宋懺紅、金石聲、曾

存呉、陸鏡若、趙斐然、客演として馬二先生、洪蒼梅である。このメンバーを較べてみると、まず民国元年の時点で新劇同志会をまとめていたのは陸鏡若であり、曾存呉、包亜男、馮懋儂がそれに次ぐ。それから民国元年にはいなかったが民国三年に参加している元来の春柳社のメンバーは謝抗白と呉我尊ということが分かる。呉我尊は日本から呼び寄せたという記述⁽²⁷⁾があるから、民国元年の新劇同志会から次第に新たなメンバーを増やしていきながら、日本の春柳社で活躍した人物の帰国によって彼等をこれに加えることで、「春柳」を名乗るに至ったのではないだろうか。彼らの標榜する「春柳」の後継である、というこの「春柳」への強いこだわり、自らのルーツを春柳に置きそこに存在価値を見出そうとする姿勢こそが、新劇同志会が春柳の一派であるという証となりうる。その姿勢はまた、演ずる演目にも現れるのではないか。民国元年の時点で演じたのは『鐵血』『家庭恩怨記』『社会鐘』という演目であるが、『社会鐘』は日本の原作であり、『家庭恩怨記』もオリジナルとはいえ、家庭劇のカテゴリーに属す内容であり日本の新派劇の影響を受けている。『家庭恩怨記』は陸鏡若の原作⁽²⁸⁾で、軍人王伯良の家で起こる悲劇を描いたものだ。王伯良の愛人小桃紅と彼女の愛人李簡斎の策略で伯良は義理の息子である重申を失い重申の婚約者梅仙も発狂してしまう。最後に伯良は小桃紅を殺害し、以後は軍人として革命に生きることを誓う。この『家庭恩怨記』は文明戯の代表作とされ、民国三年にはすでに他劇団でも上演されるほどの人気作となった。『春柳』所載の「上海春柳劇場鏡若君所編新戯述」⁽²⁹⁾でも『家庭恩怨記』は十ある脚本中その一番始めに位置付けられている。今回調査した『申報』の報道からすると、上海での『家庭恩怨記』の初演は民国元年四月十九日ということになるが、以後春柳劇場として活動を開始する時も『家庭恩怨記』は春柳の代表作として度々演じられる⁽³⁰⁾。『家庭恩怨記』が「春柳」の『家庭恩怨記』として世に認知されるに至るにはやはり新劇同志会の活動が先にありそれを経ることで春柳の風格を深化させることになったのではないだろうか。

結び

以上民国元年からの新劇同志会の活動をまとめ、民国三年の「春柳劇場」開幕までの活動の経過を追ってみた。そして新劇同志会をどう位置付けるか、という問いに、筆者としては、新劇同志会というのは、従来「春柳派」とみなされているように、「春柳社」の一連の活動の中の過渡的な存在と捉えている。新劇同志会は日本留学時期の前期春柳社と、帰国後の「春柳劇場」すなわち後

期春柳社との中間の時期に、日本から春柳劇場に至るまでの橋渡しの存在であったといえ、春柳社と全く切り離して考えることは不可能である。

「凡そ新しい運動というものは、必ずや多くの複雑な変化を経なければならぬ、新劇同志会は各都市に公演に行き、いつも当地の関係者と協力し、各種違った方式で演出をし、必ずしも同志会の名義を用いなかった。例えば湖南で新たに成立した劇団と合作したり、後にまた文社を組織したり。組織の名称がどのように変動しようと、同志会の主旨と作風は少しも変わるところがなく、我々はずっと春柳社の継承人と自認していたので、上海で公演するときに春柳劇場の看板を掲げ誇りとしたのだ。」⁽³¹⁾

と欧陽予倩が回憶でいうように、新劇同志会と春柳劇場には一貫した「春柳」への自負があった。仮に前期春柳社と後期春柳社とを「春柳」という一つの大きな枠と捉えるならば、新劇同志会はその合間に誕生した春柳の系統を引く同系列の団体とみなせるだろう。新劇同志会を春柳というグループにおける一単位と考えて良いように思う。従来前期春柳社の活動と後期春柳社の活動との間には新劇同志会が存在していたことは周知であったが、後期春柳社というときはどうしても民国三年開幕の「春柳劇場」を指しており、そこに至るまでの道筋が資料上の制約もあり明確ではなかった。今回の報道調査はその間の実際の活動状況を探る一端であり、新劇同志会の活動に輪郭を与えるための作業であった。

本論中では活動状況に重点をおいたため、新劇同志会の演目について具体的に言及できなかったが、特に代表作の一つである『家庭恩怨記』については稿を改めて考えたい。

[付記] 本稿脱稿後、瀬戸宏氏の『中国話劇成立史研究』（東方書店 2005 年）が上梓された。瀬戸氏はその第一部第六章で「新劇同志会（後期春柳社）一文明戲の最盛期Ⅳ」という章を立て春柳社と新劇同志会の連続性を認めている。しかし氏は『申報所載春柳社上演広告』を 1914 年の春柳劇場から開始しており、新劇同志会と春柳劇場とは別の演劇団体とする見解をとっており、筆者とは見解を異にする。

注

(1) 『回憶春柳』（『歐陽予倩全集』第六集）p. 32 による。

(2) 徐慕雲『中国戲劇史』（中華民國二十七年十二月 世界書局）p. 124 ～ p. 185 が話劇の章である。

(3) 『菊部叢刊』（民国七年 上海交通圖書館発行）。筆者が使用したのは『平劇史料

- 叢刊』（傳記文学出版社發行）版であり、「歌臺新史」中の「春柳始末記」（癡葦）
p. 226 参照。
- (4) 『春柳』第二期（民国八年 春柳雜誌事務所）「春柳社之過去譚」（春柳舊主）
p. 111 ～ p. 113 参照。
- (5) 『申報』（民国元年四月二十七日星期六 旧曆壬子三月十一日）広告欄による。
- (6) 『申報』（民国元年四月十九日星期五 旧曆壬子年三月初三日、四月二十日星期六 旧曆壬子年三月初四日）の広告欄による。
- (7) 注（3）による。
- (8) 湖南時期、特に社会教育団と文社については欧陽予倩の「自我演戯以来」（『欧陽予倩全集』第六集 中国戲劇出版社 1990 年）に詳しい。
- (9) 『申報』（民国三年四月十七日 旧曆甲寅三月二十三日）による。
- (10) 欧陽予倩『自我演戯以来』（『欧陽予倩全集』第六集 p. 38）
「鏡若租定了南京路外滩口谋得利戏馆，用春柳剧场的名义开演。但是团体还是用新剧同志会的名称。」
- (11) 『中国現代戲劇史稿』『中国話劇通史』ともに「春柳社と春柳派」という章を設け、新劇同志会をその春柳の後継として記述している。
『中国現代戲劇史稿』（陳白塵 董健主編 中国戲劇出版社 1989 年 p. 53）
「从辛亥革命的第二年（一九一二年）开始，陆续回到国内的原春柳成员在陆镜若、欧阳予倩的领导下扩充力量，继续开展话剧创作与演出活动。虽然春柳社的名称已不复存在，但他们的演剧在众多的团体中仍保持着独特的风格，被称为“春柳派”新剧。」
『中国話劇通史』（葛一虹主編 1997 年 文化芸術出版社 p. 14）
「辛亥革命时期，不少春柳同人奔赴革命，无暇顾及演剧。武昌起义成功之后，陆镜若一度当过都督府的秘书，马绛士也担任了实业厅的科长，还有些成员做了官。不久，南北议和，他们又弃官从艺，云集上海，由陆镜若发起组织新剧同志会，时间是在一九一二年初。新剧同志会在张园举行首演，演出剧目是陆镜若创的七幕剧《家庭恩怨记》。（中略）从春柳社到新剧同志会，春柳同人的中坚力量较为稳定，有形成了自己的风格。在我国早期话剧的发展中，独成一派。」
- (12) 『回憶春柳』（『欧陽予倩全集』第六集）p. 187 参照。
- (13) 注（1）に同じ。p. 33 参照。
- (14) 徐半梅『話劇創始期回憶錄』（中国戲劇出版社 1957 年）p. 79 参照。
- (15) 民国元年元月十八日（旧曆辛亥十一月三十日 星期四）の広告欄による。
- (16) 『時報』民国元年元月十八日の広告による。

- (17) 『申報』「自由談 劇評」(民国元年元月廿二日 旧曆辛亥十二月初一日 星期一)による。
- (18) 『時報』(民国元年四月十七日 旧曆壬子年三月初一日 星期三)、『申報』(民国元年四月十九日星期五 旧曆壬子年三月初三日、四月二十日星期六 旧曆壬子年三月初四日)の広告欄による。
- (19) 中華演劇団については詳細不明。ただ『申報』上で民国元年四月五日に同志募集広告を、十五日には開幕広告を掲載している。それによると同団体は「歴史時事新劇を上演し社会教育の提唱を主とする」団体であり、開幕にあたり「東京より帰国した文士劇同志会を誘い四月十九日二十日両日青年会を借り開幕する」とある。後日の報道からここでいう「文士劇同志会」というのが「新劇同志会」のことであると断定できる。
- (20) 広告上に「濟助吳淞醫院假座中國青年會」とあるからこの時も病院への寄付を目的に公演を行っており、慈善活動としての公演であったことが分かる。
- (21) この時の『家庭恩怨記』は六幕であったようだ。現在テキストとして存在するのは七幕までのものである。
- (22) 『申報』「自由談」(民国元年四月二十二日星期一 旧曆壬子三月初六日)劇評「演劇同志會新劇(家庭恩怨記)評 (昔醉)」及び劇評(二)(民国元年四月二十三日星期二 旧曆壬子三月初七日)による。
- (23) 『申報』(民国元年四月二十七日星期六 旧曆壬子三月十一日)広告欄による。また翌日二十八日にも同じ広告が掲載されている。
- (24) 『申報』(民国元年七月廿七日星期六 旧曆壬子六月十四日)広告欄による。
- (25) 「社会鐘」は原作は日本の佐藤紅緑の「雲の響」。なおこの作品については飯塚容『佐藤紅緑の脚本と中国の新劇——『雲の響』『潮』『犠牲』』(『紀要』中央大学文学部 157号 1995年2月)に詳しい。
- (26) 『申報』および『時報』(共に民国元年十二月十四日星期六 旧曆壬子十一月初六日) 広告欄による。
- (27) 注(13)に同じ。p. 33 参照。1913年に湖南の社会教育團と公演を行うにあたり日本に電報を打ち吳我尊を呼び寄せたという。
- (28) 『家庭恩怨記』の脚本は現在残っていない。胡恨生による憶述(『中国早期話劇選』中国戯劇出版社 1989年所収)と、『新劇考』に収録された幕表があるが、両者には幕数や人物に違いが見られる。
- (29) 『春柳』(第一年第八期、p. 809～812)による。
- (30) 瀬戸宏『『不如帰』和『家庭恩怨記』比較』(『中国話劇研究』第十輯 文化芸術

出版社 2004 年 9 月) によれば、民国三年四月十七日の春柳劇場開幕から翌年までの間に『家庭恩怨記』が上演された回数は 20 回であるという。

(31) 注 (1) に同じ。p. 166 参照。

日八十月正年元國民華中

演劇同志會演助餉

血 鐵

第一幕
補遺

第二幕
村公

第三幕
成龍

第四幕
離家

第五幕
祥雲

第六幕
戰血

元入場券全一校均散洋一

本月二十七日
晚八時
開演
新舞台
演劇同志會
演助餉
血 鐵

図 1 『時報』 民国元年一月十八日

新劇同志會

假座張園安場第演劇

陰曆三月十一日禮拜二十六連日演

● 崑崙自結庭家說崑崙紅生催
● 黃 曲金婚由記怨恩窮曲悲憐

新劇全會開幕廣告

本會自開辦以來，承蒙各界愛護，不勝感荷。茲為推廣劇藝，特設假座，每日演劇，以應各界之需。凡欲觀劇者，請向本會接洽，定當竭誠服務。此告。

図 2 『申報』 民国元年四月二十七日